

20211026

先週末の10月23-24日にロシア史研究会大会がオンラインで開かれた〔以下、一部省略〕。

共通論題A「ソ連解体30年」。以下の3報告に対して私がコメンテーターを務めた。

藤澤潤「東欧圏の解体過程：ワルシャワ条約機構内の交渉を中心に」。

石井明「ソ連解体の衝撃と中国共産党の対応」。

酒井啓子「ソ連解体から30年、9.11から20年、アラブの春から10年：冷戦が中東に残した『ごみ』は回収されたのか」。

ソ連と密接に関わるこれら3地域について、2人の大家と1人の若手俊英による報告という豪華なラインアップで、こうした討論に参加できたのはラッキーだった。時間の制約の範囲内ではあるが、たくさんの論点が出され、様々な方向での発展可能性を感じさせる討論となった。いずれ何らかの形で、この討論を発展させることができればよいと感じる。

パネルB「昭和のロシア：戦後の日ソ文化外交の歴史的分析に向けて」。

半谷史郎「1961年のソ連製ワクチンの緊急輸入：ポリオ生ワク闘争を日ソ関係史に位置づける」。

斉藤慶子「日本国際芸術協会の対ソ連文化交流活動」。

巽由樹子「文化外交、文化冷戦、文化社会学——研究動向について」。

大変面白い企画だが、「昭和のロシア」という場合の「昭和」とはいつを指すのかが先ず気になった。昭和を大まかに①戦前・戦中期、②戦後初期、③「もはや戦後ではない」と言われだして以降という3期に分けるなら、おそらく第3期を念頭においているのだろう。その時期をどのように過ごしたかは世代によって異なる。まだ物心ついていなかった人、物心はついていても国際情勢をあまり丁寧に追ってはいなかった人、既にソ連を含む国際情勢を熱心に観察していた人等々である。そうした人たちの間での世代間交流をどのようにして進めていくかというのも一つの課題だろう。私自身に即していうと、1961年のソ連製ワクチン輸入についてはまるで記憶がないが、その4年前に、南極で氷に閉じ込められた観測船「宗谷」号の救援にソ連の砕氷船「オビ号」が活躍した事件（1957年）は記憶に焼き付いている。今にして思えば、これは日ソ国交回復の翌年にあたり、未知の国（そして、どちらかといえばマイナス・イメージの強い）ソ連が異例なほどプラス・イメージで受け取られた早い事例だったということになるのではないか。

パネルの一つの話題として、ハイカルチャーと大衆文化の関連という論点があったが、ここにもソ連特有の問題がある。ソ連の文化政策の基本は、かつて少数の特権階級の独占物だったハイカルチャーを広範な大衆に届くものにするという点にあったから、日本を含む諸外国への文化輸出においても、ハイカルチャーの大衆的受容が重視されたはずである。それは完全に不可能だったわけではないが、それを困難なものとする多数の要因にとりつかれていたというのが大まかな構図なのだろう。ソ連の核実験再開との関係で日ソ友好運動が分裂したのは交流を困難にする要因だったろうが、その中で創価学会系の親善団体がどういう役割を果たしたのかはあまりよく知られておらず、セゾングループを通じた交流と並んで、独自に追求してもよいかもしれない。また、文化交流にはいろいろなルートがあるが、あるルート（たとえば労音）がうまくいかなくても、他のルート（斎藤報告によれば、総評、民音、新手の興業主たちが挙げられている）によるソ連音楽公演はそれなり

の影響を及ぼしたかもしれない。さらに、バレエ、クラシック音楽、いわゆる「ロシア民謡」（実は本当の意味での民謡ではないらしい）、映画（これも芸術映画と娯楽映画に分かれる）といったジャンルごとに、売り込み方法も受容のあり方もそれぞれに異なっただろうという問題も面白いテーマたりうる。その他、いろんなことを考えさせる興味深いパネルであり、この共同研究が今後どういう風に発展するかが楽しみだ。

20211028

ハイカルチャーと大衆文化（ロシア史研究会大会参加記・補遺）。

「ハイカルチャー」といえばクラシック音楽とかバレエを連想し、「大衆文化」といえば「民謡」だとかポップスとかを連想する、つまり両者は全くジャンルを異にすると考えるのが常識的である。しかし、ソ連の文化政策にはそれと異なる独自の方向性があった。革命前から受け継いだハイカルチャーの伝統を否定するのではなく、むしろその「成果」を継承しつつ、それを大衆に届けようとする志向性である。それは国家補助金によって採算部門たるハイカルチャーを支えとか、チケットの値段を安く設定することで金持ちでなくても気楽に通えるようにするといった面に現われただけではない。むしろ、ハイカルチャーの内容自体を「大衆的」なものにすべきだという発想が取られた点の特異である。たとえばプロコフィエフはアメリカにいた頃は「前衛的」で複雑な作品をつくっていたが、ソ連に帰国してからは、「大衆にとって親しみやすい」作品を書くべきだという圧力にさらされ、平明さを特徴とする「分かりやすい」作品を書くようになった。「ピーターと狼」はその好例である。ショスタコヴィチの「ムツェンスクのマクベス夫人」が批判にさらされたのは多数の要因によっていて解きほぐしにくい、一つの要素として、大衆にとって耳障りな不協和音を多用しているという点があった。バレエについてはよく知らないが、「スパルタクス」のような作品はアメリカのハリウッド映画を思わせる大衆性があったらしい（ロシア史研究会大会における斉藤報告のうろ覚え）。そういう方向性を持つ作品であれば資本主義国の大衆にも広く受け入れられるのではないかとソ連の文化官僚が考えたとしてもおかしくないし、またある程度までは実際に受け入れられる面があった。文脈を異にする別の話を思い出すと、芝崎祐典『権力と音楽』（吉田書店、2019年）によれば、第二次大戦後初期のドイツ分割占領時において、後の時期の常識とは異なって、音楽政策においてはソ連の方がアメリカよりも優位に立っていた——いわば「ソフトパワー」で優位だった——という話もある。「もともと大衆に届くはずのないものを輸出しようとして、やはり届かなかった」というだけなら当たり前すぎて面白くも何ともないが、「ある程度届く条件がありながら、それでもやはり十分届かなかった。それはなぜか」という問いの方がずっと面白い。

20211108

大嶽秀夫〔酒井大輔・宗前清貞編〕『日本政治研究事始め——大嶽秀夫オーラル・ヒストリー』（ナカニシヤ出版、2021年）という本を読んだ。

私は大分以前にちょっとだけ大嶽と接したことがあるが、それは大人数の会合の中でのことであり、個人的な接触は皆無である。それでも、世代がそれほど隔たっていない（彼は私の五歳上）こともあり、何となく漠然とした親近感があった。膨大な量にのぼる彼の著

作をきちんと読むことはしてこなかったが、ときおり断片的に読みかじることはあり、多くの場合、大まかな意味で共感しながら読んだ。それらのうち『新左翼の遺産——ニューレフトからポストモダンへ』（東京大学出版会、2007年）については長めの書評的エッセイを書いて、ホームページの「読書ノート」欄に載せたことがある。今回、このオーラル・ヒストリーを読んで痛感したのは、これまで私が懐いていた漠然たる親近感、一種の片思いのようなものであり、大嶽と私は個人的体質、関心の持ち方、行動様式などにおいておよそ対極的だということである（これはどちらが良いとか悪いとかいう話ではなく、単純な事実確認である）。対極的だからといって関心を持ってないということではない。自分と非常に異なっている人間というのは、一種の「異文化」観察の対象として興味深い面もある。実際、本書はそういう意味で面白く読むことができた。本書を通読すると、あちこちに自慢話が出てくるのが鼻につくし、ところどころ記憶違いではないかという気のするところもあるが、そうした点は「ご愛敬」として、あまり気にせずに読み進めると、学界裏話のような興味深いエピソードが満載である。おそらく、戦後日本の政治学——あるいは、より広く社会科学全般——の歩みに関心を持つ人にとって貴重な素材（但し、その信憑性については別途検討の要あり）となるだろう。

個々のエピソードはともかくとして、全体的な感想として、1980-90年代は日本の政治学において一つの曲がり角だったのではないかという印象をいただいた。その際、経済学における《マル経 vs 近経》という構図よりはもう少し微妙な構図があり、うまくすれば生産的で実り多い対話が成り立ったのではないかと思えるのだが、実際にはそうならなかったように感じる。その当時、大嶽は一方の旗頭であり、そのときの振る舞い方の正しさに強い自信をいただいている。それはそれなりに理解できることではあるのだが、それでもやはりこれは不幸な成り行きだったのではないかという気がしてならない。

20211115

3週間ほど前に冷戦研究会の例会があり、2つの本の合評会が行なわれた。折悪しく、その日はロシア史研究会の大会と重なっており、私は同じ時間帯に共通論題のコメンテーターをつとめていたため、冷戦研究会の方には出席できなかったが、内容には強く関心を引かれるものがあつた。書評対象となつたのは、次の2冊。

- ①山本昭宏『戦後民主主義——現代日本を創つた思想と文化』（中公新書、2021年）。
 - ②益田肇『人びとのなかの冷戦世界——想像が現実となる時』（岩波書店、2021年）。
- どちらも興味深い著作だったので、遅ればせの感想を書いてみたい。まず①の著者は1984年生まれ、ということは「戦後民主主義」が輝きを失った後に育つた世代であり、本書の対象時期のうちのかなりの部分に関して実感的記憶はないはずである。その分、あまり思い入れなしに歴史として見ることに徹することができるというメリットがあるのだろう。一つの特徴は70年以上に及ぶ戦後史の総体を視野に入れている点であり、もう一つは、「戦後民主主義」という際に念頭におかれやすい政治史・思想史だけでなく、社会・文化などの諸側面を（大衆文化を含めて）幅広く取り上げているのが目を引く。著者自身の言葉によれば、「擁護派・否定派をともに見据えて理解しようとする試み」だという。「戦後民主主義」は早くから批判にさらされてきたし、ある時期以降は完全否定や忘却が主流になっていることを指摘しつつ、それでも「磨き直すべき価値」を今なお持っているという

考えのようだ。一冊の新書本で長い期間を取り扱い、論点も多彩であるため、個々の部分の記述がやや浅い感は否めないが、とにかく幅広い目配りによって、一つの像を描きだした点は高い評価に値する。私のように、この時代を生きてきた人間にとっては、取り上げられた多くの事項について、何となく漠然と聞き知っている程度の知識はあるが、その知識には濃淡があり（漫画や映画は私の弱点）、また多くの場合、断片的なものにとどまっている。そうした、ムラのある断片的知識を一つのまとまった流れの中に位置づけてくれるのは、この主題を専門的に研究していない読者にとっての恩恵である。他面、自分が比較的良好に知っている事項については、あれこれの批判の余地があるように感じられる。一例だが、全共闘系学生が「戦後民主主義」を否定したというイメージ（小熊英二によって広められて、ほぼ通説化した）は、私の目には、やや性急かつ乱暴ではないかと感じられる。おそらく、他の読者は各自の予備知識の度合いに応じて、それぞれ異なった個所に不満をいだくことだろう。そうした問題はあっても、とにかくこうやって一つの像を描いてくれたことの意義は大きい。

②は諸方面で広く話題を呼んでいる野心作（毎日出版文化賞を受賞したとのこと）。いくつもの野心的な課題に取り組んでいるが、主な点をざっと挙げてみるなら、国際政治に関する社会構築主義的アプローチ、グローバルな観点とローカルな観点を接合（ローカルなアクターがグローバルな政治の文脈を利用する側面に特に注目）、トップダウンとボトムダウンの接合（政治史と社会史の双方に目を配る）、世界各国（中国、アメリカ、朝鮮半島、日本、イギリス、台湾、フィリピン等々）における同時並行現象への着目（従って一国史ではなく、次々と各国を取り上げて論じる）等々といった具合である。あまりにも多くの課題に一書で取り組んでいるため、読んでいて消化不良を起こす面があり、全部を呑み込むことはできないが、とにかく知的刺激に満ちた問題提起の書であることは間違いない。全般にわたる本格的批評の用意はないが、さしあたり2つの疑問を記しておきたい。その1。少数のエリートたちからなる「トップ」については、誰を論じるべきかが比較的確定しやすいのに対して、「ボトム」は無数の人々の無数の行動や思いに関わるから、そのうちのどの部分に着目するかによって、相当大きく異なるイメージが生じるだろう。本書が「トップ」と「ボトム」をかみ合わせる形で歴史を描くことができたのは、「ボトム」のうちのある部分を特に取り出したからではないか。もちろん、歴史を書く際に取捨選択が不可避だというのは「著者による解題」に指摘されているとおりであり、そのこと自体をとやかくいっても始まらない。それはそうなのだが、気になるのは次の点である。本書は「ボトム」「草の根」が上からのプロパガンダや動員の単なる対象ではなく、むしろ「草の根」こそが「トップ」の政治を形作る重要な要因だったと主張しており、それはそれで一面の真実だろうが、他面では、「上から」の動向に翻弄されたり、あるいはそれと無縁なところでひっそりと生きたりする「ボトム」というものもあり、そうした現実に関心を寄せて「社会史」や「日常生活史」を描く人たちもいる。そうした営みは、本書の立場からは否定されるべきものなのかどうか。

その2。本書が中心的に取り上げているのは戦後最初期から朝鮮戦争にかけての時期であり、最初のうち小文字で a cold war と記されるにとどまっていた「冷戦」概念が大文字の the Cold War へと構築されていく過程が主たる対象となっている。では、その後はどうだろうか。現に大文字の the Cold War 概念が確立してしまった以上、政治家も一般大衆もそれ

を前提にして物事を考えないわけにはいかず、そういう意味では、本書の対象時期とは状況が大きく異なる。だが、構築主義的アプローチとかローカルなアクターがグローバルな政治の文脈を利用するといった視点は、その後の時期にも当てはまるはずである。つまり、一般論的には同じアプローチが適用可能でありながら、具体的状況は大きく異なるということになる。この点をどう考えるか。自分自身にも答えの出ない疑問を吹きかけるような感想になってしまったが、それというの、強く刺激される場所が多かったからである。

20211122

倉沢愛子『増補・女が学者になるとき——インドネシア研究奮闘記』(岩波現代文庫、2021年) という本を読んだ。

著者は私の大学時代の先輩に当たる。大学闘争が「収拾」された後の索漠たる雰囲気の中、駒場キャンパスで、元の全共闘系学生・院生たちがたまり場的に使っていた研究棟の一室があり、そこで何度か顔を合わせた覚えがある(彼女の婚約者も一緒にいて、まわりから冷やかされながら、仲良くしゃべっていたのが印象に残っている)。まもなく彼女はインドネシアに旅立ち、それ以来直接会う機会はなくなったが、記憶にはずっと残っていた。故・菊地昌典がゼミで「君たちの先輩で、倉沢さんというのはものすごい立派な仕事をしている人だ」と言っていたのも、その印象を強めた。専門が遠いため、直接の接点はないままだったが、その活躍ぶりを間接的に知る機会はときどきあった。本書の旧版が1998年に出たとき、私は書店で立ち読みをして、「こういう風に生きてきたのか」と感心したが、自分の仕事に追いまわられていた時期だったので、購入することもせず、立ち読みだけで済ませてしまった。私の大学院での教え子の間では女性の方が男性よりも多かったから、この本を自分で読んだり、教え子に勧めたりした方がよかったのだろうが、そのゆとりがなかった。その後も彼女は次々と著作を著わし、大部の資料集を刊行したりしているようで、そのことを知るたびに、私も叱咤激励される思いをした。そうした経過を経て、最近になってこの増補版が出た。私も現役時代よりはある程度時間のゆとりができてきたので、今度こそ購入して読むことにした。読んでみると、「フィールドワーク」というものがどういうものかとか、それをどう進めるべきかということが全く未確立だった時期に、いわば体当たりで、その方法を一から開拓してきた研究経験を縦糸に、結婚・離婚(ここまではかつて私の知っていた人が相手)、再婚・出産・育児・老親介護等々の、苦楽ともに濃密で、波乱に満ちた人生経路を横糸に綴られた回想だった。今日では、理系はともあれ文系の多くの分野では女性研究者はかつてのように少数派ではなくなっており、条件も環境も大分変わっているが、それでもワーク・ライフ・バランスをどうとるかということをはじめとして、種々の困難は相変わらずという面があるだろう。若い世代の人たちが本書を読んでどういう感想をいだくのかを知りたいという気持ちにさせられた。

20211208

今日は真珠湾攻撃と開戦 80 周年の日だが、それだけでなく、ロシア、ウクライナ、ベラルーシというスラヴ系 3 共和国の首脳が「国際法主体かつ地政学的現実としてのソ連はその存在を終えている」と宣言してから 30 周年の記念日でもある。この 3 人は直ちにこれをソ連国防大臣シャポシニコフおよびプシシュ米大統領に伝え、その後でゴルバチョフに通

知した。ゴルバチョフはこれを非立憲的なクーデタと受けとめたが、軍がエリツィン側にあらかじめ抱き込まれていたため、抵抗の術はなかった。中央アジア諸共和国の首脳たちは、このとき自分たちが無視されたことに不快の念を表明し、一時は「スラヴ連合」と「ムスリム連合」への分岐の可能性もささやかれたが、結局、条件付きで独立国家共同体への合流を決めた。アルメニア、アゼルバイジャン、モルドヴァも同様に合流した（グルジアは当時まさに内戦が始まりかけており、統一的な意思決定ができない状態にあった上、南オセチア紛争をめぐってロシアとの対抗が激化していたため、参加を認められなかった）。欧米諸国は12月8日の時点ですぐに態度を明らかにすることはしなかったが、21日のアルマタ会議で修正された独立国家共同体創設協定が調印されるのを見届けてから、旧ソ連諸国の独立承認に踏み切った。アルマタ会議に出席を認められなかったゴルバチョフは23日にエリツィンからその内容を知らされ、退陣に関わる条件で合意した後、25日に退陣演説を行なった（同時に、クレムリンからソ連国旗が降ろされ、ロシア国旗が掲げられた）。こういうわけで、8日の宣言が直ちにソ連解体を決定したわけではないが、当初は3人の政治家による陰謀的独走だったものが修正を伴いつつ事後承認を得たことにより、ソ連国家の消滅は正式のものとなった（この過程の詳細は拙著『国家の解体——ペレストロイカとソ連の最期』第20章で論じた）。

日本では、「ソ連崩壊」という曖昧な言葉づかいで、それまでのソ連体制の行き詰まりに由来する体制転換（脱社会主義）と連邦国家の解体とが漠然と同一視されている。しかし、体制転換（脱社会主義）はこれに先だつ数年の間にゴルバチョフのもとで徐々に進行していたのに対し、連邦国家の解体はこの1ヵ月の間にゴルバチョフを排除して急激に進んだから、両者は決して同一の過程ではない。数日前の朝日新聞に掲載されたゴルバチョフのインタビューは訳文に疑問があり、意味の取りにくいところがあるが（私は原文を確認していない）、補って解釈するなら、自分が推し進めていた体制転換＝脱社会主義のプロセスがソ連国家解体によって断ち切られてしまったという趣旨と思われる。第三者がゴルバチョフの「未練」に同調する必要はないが、少なくとも、ここに性格を異にする二つの過程があったことは確認しておく必要があるだろう。

20211215

最近の雑誌論文から。

Timothy Nunan, "Asymmetries of Internationalism: Performing and Remembering Subnational Internationalism in the Age of Developed Socialism," *Russian Review*, vol. 80, no. 4 (October 2021). タジキスタン、イラン、アフガニスタンにまたがって、（それ以外の諸国を含めて）あちこちを移動したり、交流したり、軋轢や失望を経験したりした人々の軌跡を追っている。subnational actors という概念はやや耳慣れない観があるが、ソ連の国内ディアスポラとか非基幹民族の人々を念頭においており、外務省や国際連帯組織に属するわけではないがソヴェト国際主義の圏内に生きていた人々が主要な対象となっている。こうした人たちの活動は公文書に記録されることはあまりないが、かなり多くのエゴドキュメントが残されており、そうした資料から個人の軌跡を追うことができるという。具体的には、タジク共和国からアフガニスタンに通訳として派遣された人と、イラン人民ゲリラ組織のメンバーでアフガニスタンに行ってアフガニスタン人民民主党とともに活動した人の例が取り上げら

れている。彼らはそれぞれに期待に背く現実にぶつかり、その目標を達することなく他の場所に移動することになった。そうした結果から見ると、ソヴェト国際主義は「失敗の物語」であるように見えるが、あれこれのモデルの輸出・輸入の成功とか失敗という枠組を離れて、彼らの交流がコピーではなく新たなハイブリッドを産みだしたという側面に注目すべきだと著者はいう。そのように見るなら、彼らが活躍した場は単なる廃墟ではなく、過去と現在の中継点として立ち現われるというのが結論である。扱われている主題に通じていないので、この論文の価値を云々することはできないが、観点としてはなかなか面白いものがあるように感じた。

日本では、長縄宣博氏がチュルク系の人々のグローバルな旅人としてのトランスナショナルな移動や交流を追っており、李優大氏がソ連とイラン〔ペルシャ〕の関係について研究を進めている。今回読んだ Nunan の論文は、ソ連時代末期からソ連解体後に及ぶ時期を扱っており、具体的な事例としてもかけ離れているが、遠いところで響き合うものがあるような気がした。